アマテラス祭祀の起源神話

阿部寛子

一　はじめに

天岩屋戸の神話は高天原における最初の大々的な祭式であった。それは「ムスヒ」の神としての「隠身」たる高御産巣日神を〈祭神〉とし、岩屋に籠もったアマテラスの復活再生を祈る祭式であったと思われる。[1] ウズメの神憑りによって「隠身」たる高御産巣日神が高天原に示現し、その神はアマテラスと並んでその後重要な働きをなしていくがこの段はいわれるように、その後の天孫降臨の段とひとつづきのものであろう。難解で知られる降臨の段は、高天原から神々がはるかな地上へ降臨するいわばクライマックスでもあるが、ここは、アマテラスが祀る神から祀られる神に転成するという大きな意味をもつ段としても注目されよう。そこには「鏡」をわが「御魂」として「いつきまつれ」とするアマテラスの詔があり、「伊須受能宮」という現在の内宮に相当する宮の名があることから、この段を、伊勢神宮の起源譚であるとする見方もある。[2]

一方、書紀の降臨の段には右のようなアマテラス祭祀にかかわる伝承はなく、崇神・垂仁紀によってアマテラス祭祀の神人分離や斎宮倭姫命による遷宮伝承が語られる。その書紀の伝承がいわば歴史化された伊勢神宮の起源であるなら、『古事記』の場合は神話化された起源伝承ということになるが、その起源を神代に求める意図とは、一体何なのか。

この段の一つの目的に地上におけるアマテラス神鏡奉斎の起源を語ることがあったにちがいない。その起源が神代に

語られているということは、斎宮による祭祀のはるか以前、つまり斎宮祭祀の前史としての神話的起源が、ここにあるということになる。

このことをいうためには、もちろんさまざまな問題を解決しなければならない。

二　「五十鈴宮」のこと

天孫降臨の段は、まずはアメノオシホミミノ命に降臨の指令がくだされるところから始まるが、ことは簡単には進まず、ホノニニギ命の誕生そして天八衢におけるサルタヒコの出現といった経過を経て皇孫ニニギの降臨が語られることになる。そのいざ降臨という時に、祭祀氏族の祖神であるいわゆる五部神が加えられ、さらに三種の神器と他の神々がそえられて、「鏡」をわが「御魂」として祀れというアマテラスの詔が下されるわけだが、ここに地上におけるアマテラス祭祀の起源が語られることになった。

続く一文が問題の「此二柱神者、拝祭佐久々斯侶伊須受能宮」である。[3]「二柱神」が何れの神をさすか、またその二神とは「伊須受能宮」の〈祭神〉なのか、〈拝祭者〉なのかが問われ続け、未だ定説はないようだ。その点については後述するが、まずその前提として「伊須受能宮」について考察しておこう。この「五十鈴宮」とは現在の「内宮」をさすといわれるが、現代との比較の問題より、神話や伝承における「五十鈴宮」という表現が意味するものを確認しておきたい。

時代は下るが、八〇四年に成立したという「皇太神宮儀式帳」によると、

御坐地。渡會郡宇治里。伊鈴河上之大山中。

とあり、神宮の「御坐地」は「伊鈴河上」とされている。しかも「大山中」にあると表現されているわけで、そのイメージは悠々たる森に囲まれたまさに神の鎮座地にふさわしい。その地はまた「宇治土公等遠祖」である太田命が、「いすずの川上」によき大宮の地があるとして献上したものであるという。すなわち、「伊鈴河上」とは、神が降臨したり鎮座するにふさわしい聖域として、神話的に選ばれた表現とみなすべきだろう。

サルタヒコの場合、「吾は伊勢の狭長田の五十鈴川上に到るべし」（『書紀』第九段、一書第一）といい、ウズメはそこへサルタヒコを送ったことになっている。ここでも「五十鈴川上」は天八衢からサルタヒコが還った地、すなわち天から降り立った地ということになる。スサノヲが高天原から初めて出雲に降り立った地も「出雲国の肥の河上」、鳥髪の地であった。すなわち「川上」とは神の降臨の地であり、神と接する場所であったのだ。

さらに、垂仁紀の次の伝承にも「五十鈴川上」は現れる。

天照大神を豊耜入姫命より離ちまつり、倭姫命に託けたまふ。ここに倭姫命、大神を鎮め坐させむ処を求めて……伊勢国に到る。時に天照大神、倭姫命に誨へて曰く、……故、大神の教の随に、其の祠を伊勢国に立て、因りて「斎宮于五十鈴川上」に興てたまふ。是を磯宮といふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり。

（垂仁、二五年三月）

いわゆる書紀の伊勢鎮座伝承であるが、これが歴史的事実ではないことはいうをまたない。この伝承の由来について岡田精司氏は「伊勢神宮の起源にかかわる正史の記載は、巫女の物語がすべて」であるといわれ、右の伝承も「斎宮の起源伝承」であり、「神宮に奉仕する巫女たちが、託宣の形で語った鎮座の由来譚」であるとする。(4)

右については「天照大神を祭る『祠』を伊勢国」に立てたので、「因って」「斎王であるヤマトヒメの籠もる場所の斎宮をその近くに建てた」と解釈される。そして、内宮の所在は自明のことであるから〝伊勢国〟だけで充分であり、「五十鈴川のほとり」という具体的な位置を示すのは「斎宮たちの関心の重点」が「斎宮の起源を語ることにあった」からとされた。

「五十鈴川上」を、岡田氏は「川のほとり」と訓んでいるが、これは文字通り「川上」で、「則ち天照大神の始めて天より降ります処なり」とは、右の例と同様、「川上」とは神が降臨する場合の神話的表現であろう。右と同類の伝承は『古語拾遺』にもあるがそこには「神の教えの随に、其の祠を伊勢国の五十鈴の川上に立つ。因りて斎宮を興て、倭姫命をして居らしむ」とあり、ここでは「祠」は「川上」に建てられたことになっている。すなわち、「祠」も「斎宮」も、広く祭祀にかかわる場所として、特定するより、神の降臨する「川上」といういわば神話的聖域に存在したと解釈すべ

きではないだろうか。

「天照大神の始めて天より降ります」ということは、アマテラスの降臨が「五十鈴川上」における出現という形で語られていたということでもあるだろう。それは岡田氏のいわれるように、斎宮の伝承であったのかもしれない。氏によれば、斎王は、日常は斎宮に籠もっているのが任務であって、「常住している斎宮こそが天照大神の最初の降臨地である、という伝承の生まれる条件が」あったのであって「籠もって物忌みを続ける場が実際の祭場と離れていても、その場所こそが祭神の出現した聖なる処であると託宣で語られたとしても不思議はない」ということになる。[5]

アマテラスの出現した地は「五十鈴川上」であった。それを、祀る者としての斎王が語ると「川上」に斎宮が存在したことになる。その出現の地は、高天原からいうなら「降臨の地」ということになり、降臨したアマテラスが初めて祀られた神話的な「宮」こそ「五十鈴宮」ということになろう。神代には、歴史的存在としての斎王の存在はない。

降臨の段の「五十鈴宮」とは「五十鈴川上」降臨後の鎮座の宮に違いなく、その発語の直前でアマテラスが「鏡」を御魂として祀れという詔を下した以上、降臨後の宮の、その「拝祭者」をこそ続いて指令するというのが論理的展開ではないのだろうか。

ニニギはその後「日向の高千穂のくじふるたけ」に降臨する。そこに営まれたニニギの宮は後に「高千穂宮」とよばれたことがわかり、それはヒコホホデミ・ウカヤフキアヘズという日向三代にわたる宮となっていった。ことは同様にアマテラスは五十鈴川上に降臨し、その宮が「五十鈴宮」として奉斎されるようになることの起源がここで語られていると考えられるだろう。

右のような論理的展開上、〈祭神〉説ではなく、〈拝祭者〉説を指示するのが私見の立場ということになるがその二神については西宮氏のいう「思金神・ニニギ」と考えるわけにはゆかない。難解で知られるこの段の緻密にして詳細な分析が近年西条勉氏によってなされており、氏の業績に多くを負いながらも、見解を異にする点についてのみ次に私見を述べてみたいと思う。

三　「二柱神」のこと

A　ヒコホノニニギノ命に科せて詔ひしく、「此の豊葦原水穂国は、汝が知らさむ国ぞと言依賜ふ。故、命の随に天降るべし」……

B　天照大御神・高木神命以ちて、天宇受売神に詔ひしく「汝は、手弱女にあれどもいむかふ神と面勝神ぞ。故、専ら汝ゆきて問はまくは、『わが御子の天降らむとする道に、誰ぞ如此して居る』ととへ」とのりたまひき。故、問ひ賜ひし時に、……

Aはニニギにたいする葦原中国統治にかかわるまさに政治的な詔である。この政治的指令をうけてニニギは日向に天降ることになるが、ついでBのサルタヒコの名をあらわすウズメの活躍をはさんで、さらに指令が下される。すなわち高天原祭祀で活躍した神々たち「五伴緒」が加えられたのである。その部分を次に整理して順次引いてみる。

C　(1)　爾くして、天児屋命・布刀玉命・天宇受売命・伊斯許理度売命・玉祖命・并せて五伴緒を支ち加えて天降しき。

(2)　是に、其のをきし八尺の勾玉・鏡と草那芸剣と、亦、常世思金神・手力男神・天石門別神を副へ賜ひて、

(3)　詔者、「此之鏡者、専為我御魂而、如拝吾前、伊都岐奉」、

(4)　次「思金神者、取持前事、為政」。

(5)　此二柱神者、拝祭佐久々斯侶伊須受能宮。次、登由宇気神、此者坐外宮之度相神者也。

(1)は天岩屋戸の段で活躍した神々であり、祭祀氏族の祖神「五伴緒」がここで加えられているが、ここの「天降しき」とは、ニニギと共に「五伴緒」の諸神にかかると考えるべきだろう。(3)のアマテラスの「詔」の対象について。論はわかれるが、ニニギとみなす見解が多いようだ。[6]「吾が前を拝む」とは高天原の祭式の際の神々の行為と重ねて考えるべきだと思うが、その神々とは、(1)の「五伴緒」に属し(2)に名をあげられている「思金神・手力男神」である。すなわち、これらの神々が、ニニギの降臨に際して「副」えられた理由とは、高天原の祭式を根拠として、その功績にちなんだ神々に職掌として祭祀のことに預からせるためであろう。

Aの詔では政治的指令が下された。対してこのCの詔では、祭祀にかかわる指令が下されたと考えるべきだろう。そしてこの詔の対象とはそれが祭祀にかかわるものである以上、ニニギを含めた、これら祭祀にかかわる諸神すべてに対するものと解釈すべきではないか。この詔の対象をニニギとするにはいささか無理があろう。B・Cいずれにもニニギの名は表面には現れていないし、しかも日向に降臨するニニギに対し「五十鈴宮」における祭祀を命ずるのは論理的矛盾といえないか。日向と伊勢が、神話的方位としてたとえ重なるという見方をしても、「高千穂宮」とは別宮であるアマテラスの鎮座する宮としての「五十鈴宮」の奉斎者がここで指定されたと考えるべきだろう。次に問題となるのは、崇神記に「豊鋤比売命者、拝祭伊勢大神之宮也」とみえる、斎宮トヨスキヒメ登場までの神話的空白をうめる祭祀担当者のことではないのだろうか。「五十鈴宮」を拝祭したのは何れの神と考えるべきなのだろうか。

(4)の思金神と「政」について。「思金神」は「政」をせよ、といわれるが「政」とは何かということが問題だ。国を統治する「政治」はAのニニギへの指令にあったわけであるからここはやはり祭祀にかかわる「マツリゴト」であろう。思金神とは高御産巣日神の子であり、「思慮の神」であった。高天原祭祀においては、まず祭祀の方法を思いめぐらし、(鏡を作り)さまざまな神に指令をした存在であった。西郷氏の「祭りのことだけでなく政務についても思いめぐらし統括する神」、「政務のことにあずかる宮司」[7]という説は魅力的だ。神宮祭祀にあたって、宮司の職にあったのは中臣氏であり、同氏はまた「祭主」にも任じられていたからである。[8]それを神話的表現でいうなら西条氏の「神意の執行者」という表現になるだろう。氏は『記伝』の「取持前事、為政」とは「天照大御神の御魂の御政を取行」うことであるという説を受けて、思金神は「神鏡の所持者ないしは管理者のように扱われている」とし「祭祀の当事者といった趣」であるとされた。氏のこの説を全面的に支持したいが、氏はしかしこの思金神を〈祭神〉と解釈するのであり、ここから私見はわかれていく。[9]

高天原祭祀について熟慮し指示し執行したのは思金神であった。たしかにそれはアマテラスの「神意を現す統轄者」とみなされる。しかし、それはあくまで事前に「思慮」しての「執行」である。その高天原祭祀においてもうひとつ忘れてはならないことは、神の言葉を聞くことができるものの存在であろう。「神憑り」をして託宣するものだ。この神の

ことばを聞くことこそ原初的祭祀の要となるものではなかっただろうか。高天原で神の言葉を伝えることができる始原としての巫女神はアメノウズメであった。ウズメはBにおいても、アマテラス・高木神のことばをとりつぐ存在として、サルタヒコと対峙しているのだ。すなわちこの二神、思金神とウズメこそ、『古事記』の高天原神話の中でもっとも重要な位置をしめる存在ではないのか。「神意を聞くもの」と「神意の執行者」。この二神のことは、当然次の(5)の「二柱神」と「拝祭」の問題につながっていく。

(5)は、「二柱神ハ」、「五十鈴宮ヲ」、「拝祭ル」と訓む西宮説に従う。こう訓むと、ここで「五十鈴宮」を祀るものの起源が語られたことになり、神話時代の「五十鈴宮」とは、地上におけるアマテラス祭祀の起源を語るものであろう。対する、皇女による「伊勢大神の宮拝祭」とは、いわゆる「斎宮」の起源を語るものとみなすべきだ。とするなら、この降臨の段の「五十鈴宮」とは「斎宮」祭祀の前史としての神話的「宮」ということになるのではないだろうか。天孫の降臨は日向であり、その後いわゆる日向三代を経て人代（カムヤマトイハレヒコの代）が始まるという神話的時間軸は、このアマテラス祭祀の時間軸とどのように向き合うのか。すなわち、倭姫命によるアマテラス祭祀が垂仁朝に始まったと書紀が語るなら、『古事記』においては、そのはるか悠久の昔、アマテラスが降臨した神代に、「斎宮」の前身である神話時代の神々によって祭祀が始まったという含みがあるはずだ。

「〈を〉まつる」では、「すでに五十鈴宮の存在を前提にしている」という指摘があるが、ここでは宮の創始を語ることより、アマテラス祭祀の方法とその祭祀者を語ることに重点があったと考えるべきではないだろうか。右に、ニニギの降臨後高千穂宮が建てられたことにふれたが、降臨後「宮」が建てられることはもちろんであり、それが省略されたのがこの場合であろう。アマテラスの降臨は「五十鈴川上」であった。神の降臨とはすなわち祭祀の始まりを意味しよう。その神の住まい、すなわち「宮」が五十鈴宮であって、それを奉斎するのが「二神」ということだろう。

その二神が何れの神をさすかの問題については「詔が発せられた天孫と思金神」と考えるわけにはゆかない。思金神が(2)に登場する後続三神の代表神なら、もう一神とは(1)の「五伴緒」のなかの一神とみるべきではないのか。単に代表というなら、その中には後の伊勢神宮祭祀の中心的存在になる中臣祖・天児屋命がもちろんいる。しかし、書紀一書に

もあるように、天児屋命は太玉命とセットになって登場しており、祝詞奏上と幣帛献上とは離れ難い役割と考えるべきだろう。

その五神のなかで、突出した存在といえるのが宇受売であろう。右に述べたように神のことばを伝える存在、あるいは高天原ではタカミムスヒを、天八衢ではサルタヒコを示現させた存在として『古事記』では大きな役割を担って登場するのが、このウズメである。

再び、(3)の「詔」の受け手の問題に戻ろう。国譲りの段以後、この降臨の段までの天照大神の詔は、高木の神とセットになってすべて対象を明記して「詔」を発している。

① 天照大御神・高木神の命以て、太子正勝吾勝々速日天忍穂耳命に詔しく……
爾くして、その太子正勝吾勝々速日天忍穂耳命の答えて白ししく……

② 是を以て、白しし随に、日子番能邇々芸命に科せて詔しく……
爾くして、日子番能邇々芸命の天降らむとする時に、天の八街に居て……

③ 故爾くして、天照大御神・高木神の命以ちて、天宇受売神に詔ひしく、「汝は、手弱女人にあれども、いむかふ神と面勝つ神ぞ。……」(サルタヒコの登場と名告り)

①はオシホミミへの降臨の指令とそれに対するニニギ誕生の答え。②はそのニニギへの降臨の指令。③は天八衢にいる「光る神」(サルタヒコ)に対応せよというウズメへの指令。そして既に掲げたCの詔に続くわけだが、Cの(3)の詔には、何故その対象が明記されないのだろうか。それは、右の①〜③のように対象が一神ではなく、直前に述べられた神々すべてが対象となっているからではないのか。すなわち、すでに述べたように、文脈上、(1)の「五伴緒」と(2)の「思金神・手力男神・天石門別神」らすべての神々に対して〈詔〉が下されたのであり、そのなかの思慮の神「思金神」と、巫女神としてのウズメが「五十鈴宮」をいつき祀ったというのが、降臨における祭祀にかかわる起源の説明であろうかとおもわれる。

四　斎宮前史

それにしても何故思金神とウズメなのか。二神を「五十鈴宮」奉斎者と考えるなら、ウズメの機能についてもう少し考えなければならないことがある。

『皇太神宮儀式帳』には、右の冒頭伝承の後、「倭姫命の巡行」とその鎮座、さらには「禰宜」と「大物忌」の起源伝承が語られる。

平安朝における伊勢神宮祭祀の中心は神職の「禰宜」と「大物忌」にあるといわれるが、その禰宜と大物忌の起源がそこでは「倭姫」時代以来のこととして語られている。すなわち、鎮座地を定めた倭姫命が、朝廷に帰参した時以来の「禰宜」職であるというのである。

倭姫内親王。朝廷爾参上坐支。従是時始弖。禰宜氏無絶事弖。職掌供奉。

倭姫は禰宜を定めてから都に帰り、それ以来、禰宜は絶えることなく神に仕えてきたとされているが、ここには「倭姫の代わりに神宮の祭祀をとり行ってきたのだという、禰宜の立場を主張する意識」がある。(10)

また大物忌についても次のような起源伝承がある（「職掌雑任」の項）。

……職掌。天照大神朝御饌夕御饌供奉。此初大神ヲ頂奉斎倭姫内親王、朝廷還参上時仁。今禰宜神主公成等先祖。天見通命乃孫。川姫命。倭姫乃御代仁大物忌為弖。以川姫命大神乎令傳奉弖。従其時始弖。大神専手附奉弖傳奉。今従斎内親王。大物忌者於大神近傳奉。晝夜不避。迄今世最重。乃大物忌元發由如件。……

ここには、垂仁朝に初代斎王であった倭姫が一時帰京したとき、その間の斎王代理として内宮の荒木田神主家の祖先の天見通命の孫の川姫にアマテラスの身辺のお世話の奉仕を命じたこと、それ以来、大物忌は斎王に従って昼夜の区別なく祭神天照大神の側近の世話を奉仕する重職につくことになったことなどが語られている。すなわち、天照大神に朝夕の御饌を奉ることで日々天照大神に仕えていることが大物忌の職掌であることがわかるが、右の起源伝承には、大物忌が、倭姫の代理であることが明確に叙述され（事実上斎宮よりも神の近くに仕えて枢要な位置を占めているともいわ

れる）ている。[11]

この大物忌とは、いわば禰宜の分身であり、職掌が複雑化してきた後の存在であるという。[12] すなわち、右の起源神話によれば、禰宜も大物忌もいわば倭姫命が不在の間、その代理として奉仕をしたということに端を発することになる。その始原は斎宮によってアマテラス祭祀がなされていた職が、後に禰宜と大物忌とに分化していったともよめるだろう。

垂仁紀の倭姫の鎮座伝承によれば、倭姫命はアマテラスの託宣によって鎮座地を決めたわけであるから、斎宮とは、神のことばを聞く存在として伝えられていたことがわかる。またその代理をつとめる大物忌の童女についても、伊勢神宮の三節祭の前夜の行事で、神憑りと託宣があったらしいことが伝えられている。[13] すなわち倭姫のいわばシャーマン的特性はこの大物忌に引き継がれていることになる。もちろん、平安朝の斎宮にはもはやそうしたシャーマン性をみることはできないが、その原初的段階で「神の声を聞く」という巫女性が祭祀の要であったことは崇神天皇の祭祀や神功皇后の神憑りでも知られるところであろう。

こうした斎宮や大物忌の機能を象徴する神話的存在こそ高天原祭祀で神憑りをしたウズメと考えられるのではなかろうか。

伊勢神宮における祭祀は、右の禰宜と大物忌が中心であったといわれるが、儀式帳はその他「大内人一人・内人二人」といった職掌の構成を伝えており、この大内人職が宇治土公のものであった。「大倭神社注進状裏書・忌部氏家牒」によれば、「阿礼者、宇治土公庶流、天鈿女命之末胤也」ということになり、阿礼は、ウズメの後裔として猿女君に属し、かつ宇治土公の庶流ということになる。[14]

猿女君は「古語拾遺」にも伝えられるように、平安朝には衰退しつつあった氏族である。しかしながら『古事記』の「誦習」者たる阿礼が宇治土公のわかれであるということになれば、斎宮前史の神話時代においてアマテラスを祭ったという主張がでてきても不思議はない。

斎宮前史といっても、もちろんウズメと斎宮とが直結するわけではない。日向三代にわたる神話的時間軸があったよ

うに、アマテラス祭祀の神話的時間軸もあったはずだが、中世になって、サルタヒコ―太田命―宇治土公という伊勢神話の時間軸が形成されてきたようには、ウズメの場合は明確にすることはできない。ただ日向三代に対応する伊勢神話の時間軸を高天原で活躍したウズメの祭祀を媒介にして考えるなら、斎宮の前史としての神話的起源譚という意味で、私には納得がいくのである。

五　むすび

天孫降臨を契機に、アマテラスは「祀る」神から「祀られる」神へと転成する。アマテラスは「鏡」をわが「御魂」として祀ることを指令したが、続いて命じた内容は何であったか。それはおそらく、降臨後の祭祀者の指令であっただろう。その宮は、神代では「伊勢大神宮」ではなく「五十鈴宮」と表現されている。「伊勢」は「ヤマト」からみて地上の天原（高天原）であり、高天原のアマテラスは、その「地上の天原」のなかの「五十鈴川上」に降り立ったのだ。その「五十鈴川上」とはすなわちアマテラス祭祀が始まった地を意味しよう。神が降臨して初めて「宮」はつくられる。その宮を「奉斎」する者こそ、問題であったはずだ。

倭から派遣される「ヤマトヒメ」が祀る宮は「伊勢大神宮」と表現される。

その前史ともいうべき、神話時代におけるアマテラス祭祀は、降臨の地を意味する「五十鈴宮」で行われたと理解すべきだろう。

アマテラス降臨、その人代の斎宮に到るまでには悠久の時間軸が存在した。その意味において、斎宮前史ともいうべきアマテラスの神話的祭祀者とは、高天原の祭祀で活躍した神々だったのだ。本稿ではそれが思金神と宇受売であるという論理をたててみたが、この問題にはまだまだ解決すべき多くのことが残されている。

注

（1）拙稿「天岩屋戸の神話（一）」（『調布日本文化』九号）・「天岩屋戸の神話（二）」（『調布日本文化』十号）

(2) 「五十鈴宮」とあることから、ここは伊勢神宮の起源を語るものといわれる。最近では西条勉氏によって力説されている。(「〈皇祖神＝天照大神〉の誕生と伊勢神宮――古事記の石屋戸・降臨神話の編成――」)(国文学論輯15　平成六年三月)。

(3) 「拝祭」については、

①「五十鈴宮」の奉斎者か(〈を〉と訓む)、②「五十鈴宮」の祭神か(〈に〉と訓む)と、大きく二説にわかれるが、宣長以来、「拝祭」を「にイッキ祭る」と訓み、神鏡と思金神がイスズノ宮に奉祀された意であるとする。その後西宮説が現れ、「をイッキ祭る」と訓み、「ニニギと思金神が、イスズの宮を祀る」説が有力となった。この西宮説を妥当なものとしながら、西条氏が指摘する欠点は、こう訓むことで「すでに五十鈴宮の存在を前提にしている」ことになり、「五十鈴宮ニ」と訓むことで、初めてその起源が語られたことになるという。

(4) 岡田精司氏『古代祭祀の史的研究』

(5) 注(4)に同じ。

(6) 「詔」の対象について記伝説は、「皇御孫」とし、その訓については「此二柱神ハ、さくくしろいすずの宮〈に〉拝祭る」とする。二神とは、天照大神・思金神をさし、五十鈴宮の〈祭神〉であるとする。西条氏もこの説を支持。

(7) 西郷信綱氏『古事記注釈』第二巻

(8) 『延喜式』「伊勢太神宮式」宮司の条。

(9) 西条勉氏は、「天孫ハ、天照大神(鏡)・思金神ヲ、五十鈴宮ニ拝祭する」と〈祭神説〉をとり、鏡と思金神をセットにして、その「神意の執行者」と解する(前掲論文(2)に同じ)。

(10) 久富木原令氏「皇太神宮儀式帳をめぐって」(『古代文学』37)

(11) 注(10)に同じ。

(12) 桜井勝之進氏『伊勢神宮』

(13) 岡田精司氏によると「祭りの前夜すなわち十五夜の亥刻に第二御門において御巫内人が木綿かづらを着け琴を弾き、『天照坐太神ノ教ヲ請フ』ということがあった。これは祭儀に参加する神職たちの罪穢の有無について、神意にかなったか否かを告げるもので、口笛によって神事参加を占うものであった」という(『古代祭記の史的研究』)。

(14) アマテラスの伊勢降臨神話を猿女系の伝承ではないかとする説はしばしばあるが、もちろんそれを証明することはできない。近年では、西郷信綱氏が「二柱神」をサルタヒコとウズメと見て、この二神が神宮をイツキマツッタとする。また思金神がイツキマツルことは絶対ありえないというが、私見によれば、思金神とウズメがまつることのほうが論理的であると思われる。また、この西郷説を間違いとする批判もあるが、ウズメについては支持したいと考える。